

自分の過去へ突き進む

—ルート・クリューガーの『生きつづける』について—

関 口 なほ子

1. はじめに

2020年10月6日、ルート・クリューガー（Ruth Klüger, 1931-2020）はその生涯を閉じた。彼女の自伝『生きつづける』（weiter leben – Eine Jugend, 1992）には、ナチ時代の迫害の体験やその後の人生における自己ならびに他者に対する省察が、時代情勢とともに克明に綴られている。¹⁾ そこでは想起される局面に応じて子供、少女、娘、母、大学教授、作家等の異なる視点が、「私・語り手」の役割を担う。1942年に10歳で生誕の地ウィーンから母親（Alma Hirschel）とともにナチに連行されて以来、ルート・クリューガーは複数の強制収容所、テレージエンシュタット、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ（1944年5月）、ニーダーシュレージエンのクリスティアンシュタット（1944年6月）²⁾へ移送されている。ドイツの戦況の悪化に伴い、ロシアやアメリカ軍の接近が13歳のルート・クリューガーに意識されていた1945年2月初旬、グロース＝ローゼンでの宿営の混乱に乗じて、収容所間の徒歩移動の際に彼女らは「逃亡」を「決断」する。その結果、母娘は「死」への道行きを幸運にも免れる。この「決断」は政治権力による理不尽な強制、人権の剥奪、矛盾にみちた「転落」（WL, 113）から、「無頼の自由」への獲得を意味するものとなる（WL, 167, 169, 172）。

1947年母とともにアメリカに移住するまでの2年半の間に、高校卒業資格を得るために、東欧の難民、保守的なバイエルン人、元党员からナチのシンパに至る様々な立場の人間から、クリューガーは個人教授を受けている。そこで彼女は女性蔑視や差別（WL, 210）、ナチを擁護する歴史観や旧態依然とした社会の偏向の数々から、連合国による非ナチ化計画の形骸化を知る。また『生きつづける』には、戦後の社会を担うインテリ世代の

典型的なドイツ人も描かれている。その一人がレーゲンスブルク大学の友人クリストフである (WL,145)。彼は反ユダヤ主義に始まるユダヤ人の災禍が加害者の「恣意性」(WL,148,219), すなわちドイツ人の「自由意志」によると考える「私」(ルート・クリューガー) に対して「中庸な尺度」の欠落を指摘する一方で、「ユダヤ人憎悪」はユダヤ人の「異質さ」に起因することも容認する (WL,218f.)。「アウシュヴィッツ」に集約される事象全般に対して、このような見解は、ドイツ社会におけるユダヤ人被害者の思考と意識を二重に拘束するものとなる。たしかに強制収容所 (KZ) からの生還者である「私」が戦後なお感じている「抑圧」は、第三者とりわけ加害者側に立つ者からは被害者意識にすぎないと一蹴されかねないものである。それが被害者にとって「健全な抑圧」(WL,181) として作用し、心理的負荷を軽減し、過去の「克服の第一歩」になる場合もある。だがこのような楽観的な思考の優位によって、忘れてはならない過去の「真実」が黙殺される場合もある。

「同時性の謎」(WL,145) を取り上げたエピソードでは、ドイツ人とユダヤ人が同じ時間と空間を共有していても、各人が置かれる状況やそれに伴う心理の差異によって、同一の風景が相容れないものに一変する「私」の感覚体験が強調されている。KZ 行きの貨車の中から「私」が見た風景とその貨車に向かって「旗を振るドイツ人少年」が見た風景は、「アウシュヴィッツ」に対する「私」とクリストフとの理解が決定的に断絶していることを明示する。またプリンストン大学出身で、ゲッティンゲン大学のドクトラントであるギゼラはアラブ人に対する偏見を持ち、テレージエンシュタットを空爆時の惨状と比べて過小評価する (WL,93)。

アウシュヴィッツの帰還者からすれば、いずれの場合も強制収容所の実情を知らない者の独断的な見解にみえる。このような、戦後のドイツ社会において少なからずもたれていた誤謬や的外れな憶測³⁾ に直面して、生き残った者の「生存のジレンマ」をクリューガーは問題視する。その方法は過酷な実体験を悲観的に懐古するものでは決してない。むしろ自分自身への批判や誤解を恐れることなく、その時々々の記憶や感覚、あるいは現在の自己省察を率直に、諧謔を交えて、挑発的にすら記述する。KZ で貶められ、殴られた 10 代の「私」は加害者や傍観者から「慰め」を期待しても、共感すら起こりえない現実を「ナンセンス」(WL,148) と唾棄する。それ

は「犠牲者」の立場に浸ろうとしたその時の感傷的な自分自身の甘さへの戒めである。さらに「死者」との関りを見据えたとき、生き残りである自分が行き場を失った「亡霊」になろうとしている、あるいはなりつつあるという独自のレトリックによって自己批判がなされている。

『生きつづける』の「エビローグーゲッティンゲン」には執筆の経緯と動機が明かされている。1988年11月4日、亡命後居住地となった南カリフォルニアから、キリスト教＝ユダヤ教会の講演依頼を受けて、ゲッティンゲンを訪問した際に、ルート・クリューガーは走行する自転車との衝突によって事故に遭遇し、重傷を負う。転倒する瞬間の〈落ちてゆく〉(fallen) 感覚が、彼女の脳裏にナチ時代の記憶を浮上させる。貨車の中へ詰め込まれ、そこから強制的に収容所の中へ転がり落ちた瞬間もその一つである(WL,113)。この事故は「偶然」(Zufall)、それとも「必然性」に根ざした「偶然」であるか、ドイツ人の青年によって恣意的に引き起こされた傷害あるいは犯罪か。疑心暗鬼から誘発されるトラウマから、クリューガーは「ひき逃げの夢」をよく見たという(WL,265,270)。

この出来事が彼女にもたらしたものは肉体的な痛みだけではなく、幾重にも折り重なる感覚の纏れや感情の澱みとして、昇華されず堆積しているナチ時代の迫害体験のトラウマである。そこにはユダヤの信仰をもち、抑圧する者であると同時にともに強制収容所から逃亡し、生き延びた相手である母親との積年の確執も影響し、その一年後とつぜん彼女は突き動かされたように筆を執ることになる。所縁のある「地名」を手掛かりに、「時の中」の「場所」を「いま」に呼び起こすという手法によって。

この自伝の中心的な主題の一つに、「亡霊」といわれる殺害された犠牲者への「喪」の可能性を探求するクリューガーの「対決」(WL,279,79)が据えられている。クリューガーにとってのウィーンはユダヤ人を敵とみなして見捨てたことから、「骨の髄までユダヤ人の子どもに冷たい街」であり(Vgl.WL,68)、癒しをもたらすような「和解の試み」(UV,200)が愚かしく、不可能であることを思い知らせる場所である。ただし彼女は自らに受けた傷を全身に感染させて、化膿させようとしてはいけないという。⁴⁾それを阻止するすべが「追想や語り」を介して(UV,200)〈書く〉ことである。体験の不条理を想起する主体が「合理的な人間であり続ける」ことは困難であるため、クリューガーは「非合理的なルサンチマン」にも襲わ

れる (UV,196)。しかし迫害されたユダヤ人に固有の〈自己憎悪〉は、彼女には自覚されていない。むしろクリューガーの自伝は精神を病み、娘の心情をしばしば逆なでする理不尽な母親、女性を男性に従属させるユダヤの宗教に根付く共同体観念、また諸悪を許容するドイツの社会構造や人々の意識に対する批判や辛辣な皮肉を「誠実に」伝えるものとなっている。⁵⁾

ネリー・ザックス (Nelly Sachs, 1891-1970)、グレーテ・ヴァイル (Grete Weil, 1906-1999) のような、同時代のユダヤ系女性作家というおおまかな括りであえて限定的に述べると、彼女らの「書く」行為の根底には、共有可能な問題意識や動機があるようにみえる。その一つが「喪」の主題である。例えば 1941 年にスウェーデン・ストックホルムへ亡命したベルリン生まれのネリー・ザックスは、強制収容所体験をもたない。彼女は亡命詩人という文学史的なカテゴリーに名を連ね、いわばアウトサイダーの位置から「被害者」の運命を描出する。またミュンヘンからアムステルダムへ逃れ、潜伏生活に命運を預け、戦後ドイツに帰還したグレーテ・ヴァイルは、〈自伝的小説〉によって〈証言〉の意味と可能性を問う。生還した〈被害者〉としての良心の呵責や後ろめたさから、戦後西ドイツ社会における後退した歴史認識に対する身の処し方を模索するうえで、ルート・クリューガーには、強制収容所についての経験値がある。彼女は殺害される危険を直に肌で感じながら、数々の「偶然」によってそれを免れることのできた「潜在的な犠牲者」⁶⁾として「証人になる」(WL,117) 可能性を開いている。

2. 「喪」のありかたを問う

『生きつづける』の導入はルート・クリューガーの 8 歳の記憶から始まる。8 歳の「私」に秘密にされた事柄、「性」の話と同様に子供には聞かせたくない「死」についての話題、とりわけ「ユダヤ人の話」、「逃亡」や「拷問」の話題が「大人たちの秘密」として記憶されている (WL,9)。この事柄は「私」が成人した時点においても謎の部分を含む「秘密」であり続けている。

「私」と「父」(Viktor Hirschel) そして「母」とのそれぞれの関係においても「謎」の部分が存在する。産婦人科医であるヴィクトルは墮胎行為の密告により収監され 1940 年に釈放されるが、1944 年単身フランスへ逃亡後、ナチによりアウシュヴィッツのガス室へ送られる (WL,36)。ユダヤ教の戒律に従えば、〈女〉である「私」に死者への祈り (カディツシュ)

を唱える権限はない (WL,25)。そのため我流であれ「父」を哀悼したいという「衝動」に「私」は駆られる (WL,23)。それは芸術としての詩の無益さ (WL,31) を認識しつつ、父の不詳の死のための「儀式」をみつけることに集約されていく。その一歩として父についての「想起」が問題視される。⁷⁾

「私」の「記憶」の中の「父」は陽気で快活な人柄であり、礼儀正しい振る舞いの中にも得体のしれない「専制君主」のような面を併せ持つ。後にカリフォルニアで書かれた追悼の詩「父のために鎮魂の灯を捧げて」(WL,37f.) の中で、青年の父の写真を眺めている子供の「私」は、狂気の中で殺された人間の硬直した手の冷たさに触れようと試みる。だが「想い出の糸はちぎれ」、それ以上は進めない (第三連 第3・4 詩行)。「私」は独りきりで「むせび泣きながら」「砕けたガラスにみちた通りを」「あてどなく躓き歩く」(第四連 第3・4 詩行)。ポグロムを想起させる戦時中の光景を交えて、詩の空間には複数の時間軸が交錯している。

第三・第四連は「海辺の丘に生えるは、塩辛い茶色の草」という詩行で閉じられている。父の不在によって、父と娘の関係は不確実な部分を残しつつ、第五連において「私」は「盲目の父たち」に寄り添い、彼らを導く適任者として「王家の娘たち」の一人である「アンティゴネ」になぞらえられる。その切なる望みは「私の (強調論者) 蠟燭の灯であなたの臉に触れる」ことである (第五連 第1・2 詩行)。7連からなるこの詩の形式上の特徴は、不純韻と詩節の末行が二種類の詩行によって交互に反復される点である。その詩行は「海辺の丘」の景観を描いた上述の詩行 (3 回) と「風が静かな海原から吹いてくる」という詩行 (4 回) である。「固有の死」を奪われた父の道行きを、灯を翳すことで照らし出したいという「私」の心情への応答は、去来する「風」のみである。

この時間の空白を埋める情景描写のリフレインは、死者と生者との応答不可能性の反映と殺戮の恐怖を回避する詩的自我の心理的な抑制の表れと解釈することもできる。クリューガーも認める通り、改訂された第六連の詩行「あなたと私は見出すだろうか (…)/ 憎しみのない抑制された憤怒を」(第1・4 詩行) がのちに抹消されていることから、詩全体はKZで無残に殺されていく「父」の「激しい怒り」や想像上の「最期」からあえて遠いものになっている。

このように戦後、歴史文献から知りえた人類の殺戮の惨状において「苦渋の死を遂げる」人間の形象化は「神格化されたアンティゴネ」に焦点が移され、詩的自我の一方的な、幼い直截的な愛情が前面に出された「娘-父-神話」(WL,37)が、空白の部分を補填することになる。さらに「私」がたえず直面する事実と記憶の乖離は、必然的に「感情の不一致」(WL,29)を生じさせる。そればかりか「父」や義兄ショルシ (Schorschi) のための「喪の仕事」において犠牲者の存在を、とりわけその最期を正確に言語化できないことが、生き残った「私」による犠牲者への「裏切り」や「罪責」(WL,184f.)と捉えられていく。それ故に「偽りのパトス」に陥ることなく、父親の像を「一つ的人格」として統合する (WL,29) こと、また「嘘」や「新たな知識」に基づいた「思考」によらずに、記憶の「真実」が侵害されない方法が追求されねばならない。⁸⁾「何」が、「いかに」、「どこで」生じたか、「死でさえも」、複数の「大量の死であるからこそ」(WL,35)。

「私たちはいまガス室で人がどのように死んでいったかも知っている。いまわの際の苦悶に、強い者が弱い者を踏みつけた (…。私の父も子どもを踏みつけたのか (…。窒息する者は自由の極限に達して、やはり他の者を踏みつけるのか?あるいはそのような時でさえ、個々の違いや例外があるのか?」(WL,34)

ガス室での「複数の死」において、個別の死、すなわち身内の死を詳らかにすることは、過去の自分、つまり生き延びた自分の存在理由を知る手がかりにもなり、その意味で多重化された記憶の検証となる。それがなされなければ、喪の仕事は終わらない (WL,95)。だが資料から得た歴史的な事実や「私」の知らない、知りえない父の気質から死の真相を探ることはできない。推察される事柄だけで、故人にふさわしい「喪」がなされなければならないとしても、生き残った者には理解しきれない「何か」が残るものである。それは死者の内にある、殺された者としての「怒り」、「嘆き」、「苦しみ」である。

3. 「裏切り」のモチーフ

作家エリーザベト・ランゲッサー (Elisabeth Langgässer, 1899-1950) の娘 コーディリア・エトヴァルトソン (Cordelia Edvardson, 1929-2012) もまた、1943年14歳でテレージエンシュタットを経てアウシュヴィッツへ移送されている。私生児として生まれたコーディリアの父親はユダヤ人、彼女の母親も「2分の1ユダヤ人」であるため、コーディリアは「4分の3ユダヤ人」と規定された。母と祖母の苦肉の策により、コーディリアは形式的な婚姻によってスペイン国籍を取得するが、秘密警察にドイツとスペインの二重国籍者であることを承諾する書類への署名を要請される。1936年に帝国著述院 (die Reichsschrifttumskammer) から締め出されていたランゲッサーは「国家反逆罪」を恐れ、娘の傍らで躊躇なく署名する (GK, 114f.)。

コーディリア・エトヴァルトソンの小説『火傷した子は炎を求める』(Bränt barn söker sig till elden, 1984)⁹⁾ が書かれた動機には、母親に対する娘の不信と葛藤がある。彼女の自伝的小説は母親による「裏切り」を告発するものとなっている。クリューガーにおいても強制収容所への移送に際して、母親の不承諾によってウィーンからイスラエルへの亡命の機会を逸していたことが、彼女にさらなる禍根を残している。夫に去られた、あるいは捨てられた女が、「母親から子供を離してはならない」というユダヤの教義を盾に、自分の所有物であるかのように娘をみなし (WL, 63, 65)、自分の元を去る、極端に言えば、娘にさえも見捨てられることを許さなかったとクリューガーは捉えている。クリューガーもまた戦後亡命先のアメリカで、母親との別居を選ぶ自分の選択を娘による「裏切り」として繰り返し省察している。

このように自己検証として機能する「裏切り」のモチーフは、コーディリア・エトヴァルトソンにおいても当てはまる。彼女はKZにおいてナチのために積極的に働き「選別」から逃れ、生き延びるための可能な手立てを講じた。そのため「裏切り」の感覚は、保身を優先した母親による〈法/娘〉に対する〈二重の嘘〉から、「炎」に焼尽され「灰」と化したユダヤ人の殺戮にまで及び、「絶望」、「憤怒」、「憎しみ」からなる「燃えるような熱い塊」をエトヴァルトソンの「喉の奥」に焼き付けている (GK, 121)。彼女は殺戮の忘却を (ドイツ人による) 〈根絶〉、すなわち自分自身の存在を消す行為に等しいと考えているので、自分が「貶められ、侮られた者の一人であ

ると公言すること」(GK,121)を、自分が裏切った同胞への「償い」の一つに挙げている。

迫害の記憶の忘却という社会的な同調圧力に対して「あなたたちは私の不安を取り上げ、私の怒りから身を守るつもりらしい」(GK,103)とエトヴァルトソンは弾劾する。彼女にとって過去を語る行為は、「偶然」による「生き残り」(GK,106)の一人として現実を直視することから始まる。つまり強制収容所で「死刑宣告された者たちの顔」や敵に対峙した際の「様々な姿をした自分自身」(GK,104)を現在に呼び戻し、記憶し続けることを意味する。その過程において「生き残り」と「死者」とを隔てる境界は、クリューガーのように意識されず、「逃亡」がまさしく「アウシュヴィッツ」以降の積極的な活動を可能にする「抵抗」の一つとして洞察されている(GK,106)。

体験者として「絶望」、「憤怒」、「憎しみ」を〈証言〉する点では、クリューガーの詩作の動機と共通する。だがクリューガーにおいては、「鉄条網」に集約される、生還者と犠牲者(死者)との越えられない境界をめぐる、生者こそが死者にとって「亡霊」と化しているのではないか(WL,99)という疑問に身を投じ、「亡霊」とみなされた生き残りのとるべき道が追求されている。

4. 強制収容所(KZ)における「時景」の再生

クリューガーは「事後の語り」の中で濾過されずに残る「ざらついた感覚」に注目する。つまりKZ体験者にのみ接近可能な、想像されうる様々な感覚と言葉のずれから生まれる違和を喚起するということが、彼女の詩作ならびに文学的営為における課題として意識されている。その理由は、戦後の復興を象徴するかのような社会事業としてのKZ文化施設の現状に対する不満や不信に根ざしている。修復のために若い世代の二人の作業員によって、強制収容所跡地の壁が白いペンキで平坦に塗りこめられていくさまを見たクリューガーは(WL,186)、KZの美化が〈過去〉の「たぐいまれな愚行」を隠蔽し、戦争の記憶だけでなく、心をざわつかせる要因となる「ざらついた感覚」を鈍磨すると考える。往々にして人は「嫌悪」や「畏敬」の「対象」を「我が身から遠ざけ」ようとする(WL,110)。事実、ダッハウの収容所跡地からブーヘンヴァルトの記念碑へ押し寄せるKZツアー

の観光客 (WL,69f.) の振る舞いは、歴史観や歴史理解の変質を示唆している。そのような〈過去の克服〉事業は、「私」には〈キツチュ〉(Kitsch)¹⁰⁾ そのものであり、強制収容所への憶測や誤解を増幅させるだけである。

例えばホロコストをテーマにした作品において、一般に表象することが難しい事象を映像化する試みには、必然的に何らかの演出を伴う。凄惨な事例を観客(大衆)に広く受け入れられるようにする度合いに応じた表現上の規制が、事の次第や本質についての判断材料を制限してしまうのである。歴史的事実をフィクションというフィルターを通して見る場合、恐怖に対する生の感覚も制御される。メディアによる心理的抑制や一種の刷り込みは映像作品に限らず起こりうることである。¹¹⁾ 90年代のハリウッド映画に見られるように「サクセス・ストーリー」や感傷主義に終始する戦争体験の仮構など、〈キツチュ〉に与する傾向に逆らう姿勢が、芸術的営為において「死者」への哀悼に求められるものである。

「巡礼の地や聖地」(WL,139)と称して、アウシュヴィッツ強制収容所の「殉教者」(WL,38)を、生きる者として〈ある〉ことをやめたその「場所」(文化施設)に「閉じ込めておく」行為は、むしろ「亡霊」の居場所を提供するだけである(WL,76)。そこで「私たちが敬っているのは死者」ではなく(WL,70)、死の瞬間の記憶が宙づりにされている「亡霊」である。何のために誰に向けて祈るのかという「死者」をめぐる根本的な問いはさらに「亡霊」を必要とする「私たち」の存在理由として問い返される。人間が引き起こした過去の惨状に対する許しを、免罪符を得るかのように希う態度は、慰撫の期待と自己釈明であり、戦争責任の追及や追認のあるべき姿ではない。必要なのは空前絶後の「あの犯罪」を二度は起こらない事象として過信するのではなく、反復可能な危機を孕む現実として真摯に受け止めることである。

このように強制収容所という「場所」の現代における本来的な意味(WL,69,78)は、「私」の存在意義としてKZについて「書く」という問題に連結する。KZを当時のままに、「あたかも我々と時間の間に何もなかったかのように、言葉で記述しようとする」ことは「空間的描写」ととどまる。そうではなく「時間」の中に「一つの場所」の意味を「伝える」にはKZという「場所」ではなく、「時景」(Zeitschaft)¹²⁾という言葉がなくてはならないところである(WL,78)。時間の中に、「以前でも以後でもな

い、特定の場所」を位置づけるとき、その時間と空間を共有した人間の意識や感覚のようなものを介在させなければ、死者だけでなく、想起する者さえもいわば「亡霊」のままにとめおかれることになる。「書く」とは時間の外にいる死者を現在に呼び起こすことであり、¹³⁾ そうして初めて想起する主体の体験しつつある空間に死者を呼び込むことが可能になる。それが「私」による、死者と生き残った「亡霊」同士を結びつける方法なのである。

強制収容所という隔離された空間において〈時を刻む行為〉は、イムレ・ケルテース (Imre Kertész, 1929-2016) によれば「前へ進むこと」を意味していた。¹⁴⁾ クリュューガーの場合は暴力に支配されたKZの異常な圏域で、日常の自分を忘れないために「韻律」(WL,13)が必要であったと言われている。クラゲス (Ludwig Klages, 1872-1956) は『リズムの本質』において「空間形式は体験内容として受容されると、たとえ客観的には静止的なものであろうとも、それは運動の表現」であるため「いわば恒常的なものに置きかえられた時間性である」と説明している。¹⁵⁾ 「体験内容を受容する」行為は、ケルテースのいう「時を刻む行為」に、クリューガーの体験では「韻律」を始めとする詩の言葉と抑揚を意識に上らせる行為に相応する。

「内面的リズムがはなはだしく弱い場合、拍子を保持し、またその拍子によってリズムを保持するためには、できるだけ整った拍子が必要とされる。」¹⁶⁾

「意識的精神作業の所産」である「拍子」には「体験的（無意識的）生命現象」と規定される「リズムを強める働き」¹⁷⁾ が期待されていることから、強制収容所での「私」(クリューガー)の心身耗弱状態に際しても、辛うじて自己を保ち、生き続けるために不可欠な内面的リズムを補強したと推察される。時間の感覚を見失うかのようなKZでの点呼に際して、クリューガーは習い覚えていたシラーの詩やバラードを欠かさずに暗唱していた (WL,123f.)。¹⁸⁾ 詩の抑揚やリズムは、いわば生の座標軸となり、生きている証のように思われたにちがいない。

では強制収容所跡地が被収容者の息づきの瞬間のみならず、圧殺される

最期に至るときをも伝える空間として再生されるにはどうしたらよいのだろうか。その逆説的な答えの一端をクリューガーは、恐怖の中においてもなお、〈救済〉を信じ続ける人間の「希望」について述べたボロフスキの明察に見出している。

5. 〈時をつなぐ一環〉としてありつづけるために

ウクライナ生まれの作家タデウシュ・ボロフスキ (Tadeusz Borowski, 1922-1951) をクリューガーは「ポーランドの非常に重要な作家」¹⁹⁾ とみなしている。彼は 1943 年に逮捕されアウシュヴィッツへ、その翌年にはバーデンヴェルテンベルクの強制収容所からグッハウへ移送される。ボロフスキの自伝的作品『私たちのいるアウシュヴィッツでは』(Bei uns in Auschwitz, München (Schöffing) 1982. S.160f.) から、クリューガーは『生きつづける』に以下の部分を引用している。

「希望は人間に命令する、無関心にガス室へ行けと、反乱の計画をとどまるようにと。希望は人間を死んだ状態にして鈍くする。…希望は人間をさらに一日一日と生きる闘いへと駆り立てる。明るる日こそが自由をもたらすはずだと思うから。…希望が人間よりも強かったことはかつてないが、この戦争におけるほど、この収容所におけるほど、希望が悪を醸成したことはない。我々は教わらなかった、希望を断念することを。それゆえにガス室で死んでいくのだ。」(WL,106)

最善説の是非を問いながら、「リスボンの地震」についての考究の結びに「神には欠けている」人間の「希望」をあらたに提示するヴォルテールとは異なり、²⁰⁾ ここで言われている「希望」は「労働は人を自由にする」(WL,120) というナチの常套句と同様に、人間の善良な心性を欺くものと理解される。強制収容所とりわけ「アウシュヴィッツ」においては「労働はあらゆる意味で」「死」の「等価物」なのである。²¹⁾

ボロフスキによれば「希望」は、人間に延命を約束するかのような幻想を抱かせるゆえに、人間を臆病にする。つまり抵抗もなくガス室への歩みを進めさせるものは、他ならぬ「希望」である。裏を返せば、人間に抵抗の勇気を奮わせるのは「絶望」のみということになる。このような思考法

から「希望は人間を無為にする」というクリューガーの見解に歩み寄ると、命の不安を抱く者は危険を回避しようとするので、生きる希望をつなぐことができ、逆に「完全に希望を失えば、リスクを冒し抵抗する可能性をもつ」²²⁾ という結論に至る。

さらにクリューガーは自伝の中で、「無気力」によって誘発される「絶望」に言及する。思考停止状態に陥ったムスリムの被収容者「ムーゼルマン」は、「自動人形」のように「平然とした表情」で「自分の命」を「悠然と差し出す」という（詩「焼却炉」(WL,107)）。その行為は天意にも、一縷の「希望の賜物」(WL,108)にもよらない。なぜなら「生き延びた者は誰でもその人なりの偶然を持つ」(WL,134)ものであるが、KZにおける全ての帰結は、恐ろしいほど不毛な「偶然」にすぎないということを、クリューガーは体得しているからである。「選別」(WL,126)についての記述を先取りする詩「アウシュヴィッツ」(WL,125f.)では、「鉄条網」の背後で焼尽される人間の混沌状態を規則的な韻律を用いて整序する意図的な試みがなされている。剥奪された「自由」を愚弄する侮蔑的な殺害によって、犠牲者の歪んだ顔や緩慢な姿態を描出するには「鉄条網」の背後から照り付ける陽光では役に立たない。被害と加害の実態を暗示する残された唯一の真実は、「赤い炎」がすべてを灰燼に帰し、無きものにする非人間的な「焼却炉」の存在そのものである。

贖罪を意味する題名をもつ詩「ヨム・キプル」(Jom Kippur, WL,99)において、鎮魂の対象となる死者は、海底へ沈んでいった者たちとして登場する。先に言及した詩「父のために鎮魂の灯を捧げて」では、詩的自我の「私」はまだ「父」の死の恐怖と対峙することができていなかったために、不在の「父」からの応答は「海辺」の風に吹かれる「塩を含んだ草」の重さに代替されていた。この時の詩の情景が詩「ヨム・キプル」ではさらに深化を遂げている。

一般に塩は生誕や冠婚葬祭の儀礼において重要な意味をもち、不浄なものや悪魔的なものから身を清める効果が期待されている。さらにユダヤ教における「塩」は、神と人間を象徴的に接合する触媒とされ、²³⁾「レビ記」(Levitikus 2-13)には祭壇に捧げる供物に「神との契約の塩」を添えることが命じられている。²⁴⁾ エトヴァルトソンにおいて「火傷を負った子供」が水ではなくあえて「炎を求める」のは、焼かれた人間の生身の苦痛に匹

敵するものが炎以外にはないという含意からであると推定される。それと同様にアウシュヴィッツの生き残りが「塩水」を飲まずには、死者との「和解」のすべが得られないということは、神を疑うことなく信じ続けた犠牲者と「私」との決定的な断絶をも示唆する。

詩「救われぬ者たち」(WL,168)には、強制収容所からクリューガーが逃亡を決意した時と重ね合わせて、「救われぬ者たち」すなわち被収容者のたえまない行進の情景が即物的に描かれる。そこでは彼らを前へ進ませているものは「怠惰」ではなく「惰性」であり、逃亡に際して「私(たち)」に与えられた一瞬も同じ性質のものであると言われている。命令に従い前進する、あるいは逃亡を決意する、そのどちらにせよともに〈彼ら/私たち〉は「押し流され」る存在として捉えられ、その行先は「タール」の中である。ここでも前進する者たちが求める「水」に代替されうるのは、海水の「塩」でしかない。その結果、粘液質の「毒ガス」に充満した「肺」は言語喪失状態を引き起こし、「自由への決意」がともすれば「幻想」になりはてる状況が投影されていく。このように当事者による実体験を相対的に捉え、描写していくことに「証言」の適切なありかたをクリューガーは求めていると考えられる。

強制収容所からの逃亡を経て、難民となった経験から作られた詩「黙秘」(WL,283f.)は、戦争の被害者である「私」が至る所で「告発」され、「拒否」される不条理の自認から始まる(第三連S.284)。告発者の中には死者も数えられている。「警官」からの「審問」はすべて「あのこと」、すなわちアウシュヴィッツで起こったことについてである。それは「私の隣で」かつ「私抜きで起こったこと」と言われているが、強制収容所での体験を否定することは「私」にはできない。「見ていた」からである。それにもかかわらず証言の信憑性は留保されている:「とびきりの嘘つきな証人も／私ほど信用できない者はいない。」(第四連第4・5詩行, WL,284)

これらの詩行からも「私」が「喪」の仕事を成し遂げるという課題において、死者との「和解」を求めるのではなく、「時間」の「外側」にいる死者を「呼び起こす」ことに向かう理由が読み取れる。

死者に「代わって」証言するという「倫理的要請」は、「沈黙」を余儀なくされた「真実のことば」を「偽装」から守ることに始まる。²⁵⁾ ナチスによる言葉の「裏切り」、つまり言葉の暴力的な「濫用」によって被収

容者の存在が、グロテスクに「変形」され、無化されていったことに対して、「真実のことば」が「伝達」され「共有」されることが求められねばならないところである。²⁶⁾

自伝『生きつづける』の最終部に置かれた前掲詩「黙秘」は「禁止」(verboten)と「死者」(Toten),「証人」(Zeugen)と「否定」(leugnen)が韻を踏み、犠牲者である死者に拒絶された生き残りの証言の信憑性が問い質されている。逃亡を防ぐために電流が流されていた強制収容所の鉄条網の内側にいた「私」でさえも、「死者」と同じ境域に入ることは許されていない。ましてやガス室についての「証言」はなされえないはずである。このような自己批判を前提にして、「死者を言葉とイメージで鎮魂する試み」(WL,115)についての「私」の心情はこうである:「和解がないならそれでいい、私はあなた方の墓を一緒には掘れない。あなた方とともに死ななかつた者は、別の形で別の時に死ぬしかない」。したがって「私は死者に楯をつく」(WL,117)。

死の分有が物理的に不可能であるという認識から、「告発する」死者の視点に立ち、いわば死者の言葉を代弁しようとするネリー・ザックスとは異なり、²⁷⁾ クリュエーガーは「告発された」生き残りの視点に身を置き、遠ざかる「死者」に憎まれることを顧みず、死者へ「歩み寄る」方途を探りつづける(WL,115)。亡父の感情を直接知るすべがないならば、宙づり状態の思考と乖離する感覚の〈ざらつき〉を今の「私」の感覚から問いなおし、「脈絡」(WL,80)をつけていくことが「書く」行為の基本的な姿勢である。生き残った者が犠牲者(死者)に対してなしてしまった〈裏切り〉には、亡父による娘と妻への「裏切り」も含意されている。その幾重もの裏切りの感覚を隠蔽せずに表出することが、「作られたもの」であるとしても、「エスケイプ・ストーリー」や「ハッピー・エンド」(WL,140f.)を仕立てるような模造作品とは一線を画す「私」だけの鎮魂、喪の在り方となるのである。人間は「空間の中」だけに閉ざされた「モナドとしてある」のではない、「たとえ途切れた連鎖であろうとも時をつないでいく一環でありたい」(WL,12)とルート・クリュエーガーは述べている。それが不確実な時の経過の中に、自らの存在を位置づけることにもなるのである。

テキスト

- ① Klüger, Ruth: weiter leben – Eine Jugend. dtv. München 2009 (1992).
 - ② Dies.: unterwegs verloren, Erinnerungen. dtv. München 2016 (2008).
 - ③ Edvardson, Cordelia: Gebranntes Kind sucht das Feuer. Deutsch von Anna-Liese Kornitzky. dtv. München 1993 (Originalausgabe 1984 Bromberg, Stockholm).
- 本文中における引用箇所については、①を WL、②を UV、③を GK と略記し、該当ページを記した。

注

- 1) ズーアカンプ出版に拒否されていた『生きつづける』の原稿は、ヴァルシュタイン出版により刊行されている。Lezzi, Eva: Ruth Klüger. Literarische Authentizität durch Reflexion. Weiter leben – Still alive. In: Eke, Norbert Otto / Hartmut Steinecke (Hg.): *Shoah in der deutschsprachigen Literatur*, Berlin 2006. S.286. ドイツにおける『生きつづける』の反響については『ドイツにおけるルート・クリューガー』に詳しい。Brease, Stephan: Ruth Klügers deutsches Publikum im Spiegel der Veranstaltungsberichte. S.3-10. S.38-41. In: *Ruth Klüger in Deutschland*. Hrsg. von Stephan Brease und Holger Gehle. Selbstverlag, Bonn 1994. 『生きつづける』は1992年秋に、すでに多くの好意的な批評を得ている。その翌年クリューガーによるドイツでの朗読の旅が開始される。1993年6月の時点で、同書は4万部を超える商業的成功を収めている (S.5)。『生きつづける』の読者は好奇心からではなく、尊敬に満ちた期待をもってルート・クリューガーを迎えた。『生きつづける』の特徴として、残酷なディテールがないことやプリモ・レヴィなどの他の作家と異なり、抑うつ的な感情が少ない点が挙げられている (a.a.O., S.6f., S.38)。同書の受賞歴には1993年 J. J. C.v. グリンメルスハウゼン賞, 1994年マリー・ルイーゼ・カシューニッツ賞, 1997年ハインリヒ・ハイネ賞, 1999年トーマス・マン賞がある。Lezzi, Eva: a.a.O., S.290.
- 2) ルート・クリューガーはグロース＝ローゼンの外郭の収容所の一つに収容される。クリスティアンシュタットはドイツ東部のシュレージエン地方、現在はポーランド領となっている。
- 3) 強制収容所を生き延びた者への偏見の一つに「死者の上を歩いていった」

(WL, S.72) という安易な見方も含まれている。

- 4) Klüger, Ruth: *unterwegs verloren, Erinnerungen*, a.a.O., vgl. Wiener Neurosen, S.195-216. ウィーンに来るとクリューガーは「既視感」や「生き埋めにされた記憶」を「それでもそれを - 知っている - 私」によって呼び起こされるという。被抑圧者として、自分の異質さを意識させる記憶の障壁があるにもかかわらず、「なぜ自分はそもそもその記憶を抱きしめようとも、追い払おうともしないのか」(S.195f.)。このような自問はクリューガーの自史を解明しようとする意思の表れであり、その点からも『生きつづける』が「政治的な記憶の書」(S.213)であるとみなされる。Schmidtkunz, Renate: *Im Gespräch Ruth Klüger*, mandelbaum verlag, Wien 2008. S.14.
- 5) Lezzi, Eva: Ruth Klüger: *weiter leben. Eine Jugend* (1992). In: *Zerstörte Kindheit : literarische Autobiographien zur Shoah*, Böhlau, Köln 2001. S.228-280. Hier S.229f. 『生きつづける』には多様な視点から、様々な声調で語る作家、語り手、主人公がいる。それらがテキストの構造の内側で、一つの統一的な主体に帰属している。幼少期の経験と成人した作家のそれが、狭いテキスト空間で繰り返しぶつかり合い、交代し、補完しながら、様々な議論を統合していくことによって、クリューガーは開かれた語りの形式を検証している。
- 6) Dewitz, Claudia: *Holocaust und Mutterschaft in den Autobiografien Ruth Klüger*, Grin. Nolderstedt 2010. S.86.
- 7) Hillgruber, Katrin: Die Schriftstellerin und Germanistin Ruth Klüger wird heute 70 Jahre alt. In: *Der Tagesspiegel*, Nr. 17573, 30. Oktober 2001. S.25. 「〈生きつづける〉は〈ある種のユダヤ人の仕事〉としての想起を、同時代や次世代の者とのコミュニケーションへの絶対的な意志と結びつけている」。注 12) 参照。
- 8) 「幼年時代のイメージの不可逆性」と「自身の生について語ることの不可能性」を経験したルート・クリューガーの「造形的な語り」には、「記憶や記憶の中のイメージを組み立て、解釈しながら語る」という手法がある。Lühe, Irmela von der: *Das Gefängnis der Erinnerung – Erzählstrategien gegen den Konsum des Schreckens in Ruth Klügers weiter leben*. In: *Bilder des Holocaust : Literatur, Film, Bildende Kunst*. Hrsg. von Manuel Köppen /Klaus R. Scherpe. Böhlau, Köln 1997. S.31f.
- 9) 『火傷した子は炎を求める』はスウェーデン語で書かれている。その執筆

の動機は「犠牲者」と「自分自身」のために「書く」ことであると述べられている。この作品は1986年にシヨル兄妹賞を獲得している。コーディネリア・エトヴァルトソンはカトリック教徒としてベルリンに育つが、人種法により11歳でユダヤ人と規定される。KZから救出された後、彼女はユダヤ教に改宗する。戦後スウェーデンにおけるジャーナリスト活動を経て、1973年にイスラエルの民のために書くという自覚から、海外特派員としてイスラエルへ移住、2006年にスウェーデンに帰国する。Vgl. Edvardson, Cordelia: *Wenn keiner weiterweiß. Berichte von der Grenze*, aus dem schwedischen von Sigrid Engeler. dtv. München 2010. S.2.

- 10) SchmidtKunz, Renate: *Im Gespräch Ruth Klüger*, a.a.O.,S.43.
- 11) Vgl.Klüger, Ruth: Mißbrauch der Erinnerung: KZ-Kitsch. In: *Gelesene Wirklichkeit. Fakten und Fiktionen in der Literatur*, Wallstein Göttingen 2006. S. 52-67. Hier S.61-67. 制作側によるイメージの誘導は映画「シンドラーのリスト」(ステイーブン・スピルバーグ監督1993年)のみならず、「ショアー」(クロード・ランズマン監督1985年)においても指摘されている。その一例に、反復的に挿入されるアウシュヴィッツ行きの線路の映像が挙げられている。
- 12) Kühn, Stefanie: KZ-Haft und Erinnerung - Ruth Klüger: weiter leben. In: *Exil: Forschung, Erkenntnisse, Ergebnisse*. 27 (2007), 2. S.38-50, hier S.38. 「時景」という新語を用いて、ルート・クリューガーは〈想起〉のプロセスの機能を扱い、ドイツの想起文化を批判的に捉えなおしている。
- 13) マーガレット・アトウッド 中島恵子訳:『死者との交渉 作家と著作』英光社 2011.182頁。「死者たちは時間の外側にいる(埋められている)」という理解は、「語り」において「時景」を必要とするクリューガーの見解に連動する。「ハムレットのように死者たちは語られることを望んでいるのだ。彼らは声を失いたくないのだ。(…)彼らは我々に知ってもらいたいのだ。」179頁。アトウッドもまた死者たちのために語ることを問題にしている。
- 14) Kertész, Imre: *Roman eines Schicksallosen*. Übersetzt von Christina Viragh. Berlin 2006. S.281-284. ケルテースはハンガリー生まれの作家であり、2002年ノーベル文学賞を受賞している。
- 15) ルートヴィヒ・クラゲス 杉浦實訳:『リズムの本質』第7章「リズムの空間性・時間性」みすず書房 2017 (1923). 73頁。

- 16) 同上。第9章「拍子の生命内実について」88頁。
- 17) 同上。135～136頁。「(…) ふだんはおそらく知らしなく、しなびたふうに見える言葉から、言葉のリズムの力」に本来隠されているであろうものを「とり出すためには、韻律という鎖が必要とされうる (…)」90～91頁。
- 18) Schmidt kunz, Renate: *Im Gespräch Ruth Klüger*, a.a.O., S.26f.
- 19) タデウシュ・ボロフスキは1944年バーデンヴェルテンベルクの強制収容所ダウトメルゲン (Dautmergen) からダッハウへ移送され、1945年5月にアメリカ軍により解放されている。1946年ポーランドへ帰還。1956年に娘が生まれた5日後、オープンに頭を入れて自死する。
- 20) ヴォルテール 齊藤悦則訳：「リスボン大地震の寄せる詩あるいは〈すべては善である〉という公理の検討 (1756年)」『カンディード』光文社古典新訳文庫所収2015. 249頁。
- 21) サラ・コフマン 大西雅一郎訳：『窒息した言葉』未知谷1995. 58～59頁。サラ・コフマンの父親はシナゴグの祭司であり、信仰に篤く休息日の労働を拒否したために生き埋めにされ殺された。彼女が父親についての証言から導き出した洞察は、神との「無限の関係」を信じ続けた人間に、神に対する「絶望」はないというものである。つまり「無力さ」と「暴力」の「限界」状況を利用して、被収容者の生きる力を剥奪しようとした権力者でさえも断ち切れないものが、神と人間との関係であるという洞察である。
- 22) Schmidt kunz, Renata: *Im Gespräch Ruth Klüger*, a.a.O., S38.
- 23) Lurker, Manfred (Hg.): *Wörterbuch der Symbolik*. Stuttgart 1991. 638f.
- 24) Die Bibel: Die heilige Schrift des Alten und Neuen Bundes. Vollständige deutsche Ausgabe. Verlag Herder, Freiburg im Breisgau 2008. S.100.
- 25) サラ・コフマン：前掲書 69～70頁参考。
- 26) サラ・コフマン：前掲書 68頁参考。
- 27) ここでは詩「孤児たちの合唱」(S.54)、「あなたがた新しい家を建てる人々に」(S.12)、「救われた者たちの合唱」(S.50)、「あなたがた傍観者たち」(S.20)を想定している。Sachs, Nelly: *Fahrt ins Staublose*. Frankfurt am Main 1988.